

未来を拓く女たちに何を伝えるか

2020年7月19日（土）14：00-17：00

青山学院女子短期大学ジェンダー研究所会議室

共催：青山学院女子短期大学ジェンダー研究所

『それはあなたが望んだことですか』出版記念鼎談実行委員会

プログラム

学長挨拶 青山学院女子短期大学学長 河見誠

第一部 「青短の女子教育から新しい女性の未来へ」

青山学院女子短期大学現代教養学科教授 梅垣千尋

第二部 上野千鶴子氏、落合恵子氏、河野貴代美氏による鼎談

学長挨拶

学長 河見 誠

2020年度、青山学院女子短期大学は、ジェンダー研究所を立ち上げました。この短期大学礼拝堂を囲むような形で、事務室、ギャラリー、談話もできる集会室などを備えています。ジェンダー研究所は女子短期大学の総合文化研究所で行ってきた活動の集大成であります。そしてこののち、さらに発展させて、青山学院大学の中において、スクーンメーカー記念ジェンダー研究センターへと継承展開させていく予定です。

女子短期大学は2019年度募集停止しました。閉学が視野に入りつつある段階です。それ故にこそ今、青山学院のなかで、女性宣教師ドーラ・E・スクーンメーカーが始めた146年にわたる女子教育を総括しつつ、21世紀のグローバルな多元社会にメッセージを発し続ける働きとして受け継ぎ、発展させていかなければならない、それが青山学院の重要な使命だ、と私たちは考えています。

本学総合文化研究所は1991年4月に設立されました。今まで30年の歴史があります。そこでは、キリスト教、女子教育、家族を、核となるテーマとして繰り返し共同研究してきました。その蓄積を今、ジェンダーという観点に集約して受け継いでいきます。

総合文化研究所は教員たちが単に研究をするだけでなく、共同研究の成果を教育に活かそうという思いを持って始められました。その思いを継承し、ジェンダー研究所において

は、研究のみならず教育、そしてさらには社会貢献へ、というミッションが掲げられています。大学の外に開かれ、社会に発信し、また社会と交流し、女性や性的マイノリティのエンパワーメントを積極的に行っていく。私たちは、そのような新しい研究所、研究センターへ、活動を拡げていきます。



学長による挨拶メッセージ

今回は、その開設記念として、まさに願ってもないシンポジウム、鼎談を開くこととなりました。とても嬉しく思っています。

コロナ状況下でも、ジェンダーを切り口としてみると、日本社会、また世界の問題がよく見えてきます。問題と同時に、またそのなかで様々な働きをされている方々には、希望も見ることができます。ジェンダーという観点から社会の在り方を捉えていくことの可能性は非常に大きいです。この研究所が、未来に向けた研究、教育、社会活動・社会連携のネットワークの基地になれるよう、努めて参りたいと思います。どうぞ、皆さま、青山に集って下さい。この難しい時代を、一緒に歩んで参りましょう。

第一部「青短の女子教育から新しい女性の未来へ」

現代教養学科教授 梅垣 千尋

ご存知のように、青山学院の源流の最も古い源流のひとつは、女子教育です。1874年、アメリカのメソジスト監督派教会女性海外伝道協会の宣教師ドーラ・E・スクーンメーカー（1851-1934）が、津田仙の支援を受け、たった5人の生徒からなる女子小学校をつくりました。

スクーンメーカーが生きた19世紀末のアメリカは、まだ女性の活躍できる場が限られている社会でした。男女がはっきりと区別されたジェンダー規範に沿って生きるしかなかったアメリカの女性にとって、宣教師として広い世界に出て伝道することは、魅力的な人生の選択肢だったといえます。スクーンメーカーだけでなく、ほかにも多くの女性宣教師がこの時期、日本に赴き、多くの人びとにまだその意義が理解されていなかった女子教育を担うことになります。

こうした女性宣教師は、自分たちの使命を「暗い地に光を届ける」ものと認識しており、現代の視点からすれば、勝手な思い込みにもとづく教育と信仰の押しつけであるという批判もできるかもしれません。しかし、女性宣教師たち自身もまた、女性の置かれた限られた状況の中で、それぞれ悩みを抱えていたこと、そして、自分たちが切り拓いてきた女性の新たな生き方やその可能性を、次の世代にバトンとして手渡したい、新たな世代の女性たちをエンパワーしたい、という強い思いをもっていたことは重要でしょう。このように、青山学院のスタートがまさにアメリカと日本の女性同士の絆、シスターフッドによって築かれていたという事実には、とても大きな意味があると私たちは考えています。

さて、その後も青山学院では、女子教育という目的をもった学校の系譜が、途切れることなく続きます。女子小学校から始まる青山女学院、そして女子専門学校の伝統のうえに、ちょうど70年前、1950年に青山学院女子短期大学が誕生しました。学科の構成に示されていますように、女子短期大学が、世間的にみて「女性が学ぶにふさわしい」とされる領域をもっぱら担っていたことは確かでしょう。しかし、教育理念に謳われているとおり、教育現場としては、「短大」「女子大」の枠におさまらない「高度な教養教育」を展開するという意気込みをもっていたことは、強調しておきたい点です。「女子短期大学」という枠はあり



第一部

つつも、その中身においては、男子が四年制大学で受けているものに劣らない、「ほんものの学問」を授けようとしていたということです。

ただ、そのなかでも、やはり学生全員が女性であるという環境のなかで、たえず何らかのかたちで意識されていたのが、「女性として生きること」について考えるという学びのあり方でした。これは、教育理念にある「覚醒した女性の育成」とは何か、という問いとも関わる点です。ちょうど1980年代ごろから、日本では欧米の流れを受けて、「女性学」という学問分野が立ち上がりつつあり、この青山学院女子短期大学でも1984年から、「女性学」という科目が開講されることになりました。これは、女性を主人公とした学問で、「女性の、女性による、女性のための学問」といえるものでした。このような女性学教育の必要性を青短で説いたのが、女性宣教師のエリザベス・クラーク先生（1924－2019）です。英文学科で英語・英文学を教えておられたクラーク先生は、70年代にすでに、アメリカの女性史と女性文学、フェミニズムの思想を、授業で紹介しておられました。女性学教育はかたちを変えながら、現在も続いています。

このように「女性学」という分野は、女子短期大学の教育課程のなかで重要な意味をもつようになりましたが、それと連動するように、教員の研究活動でも、こうしたテーマへの取り組みが広く見られるようになっていきます。青山学院女子短期大学には、1991年に総合文化研究所という組織が創設されましたが、このなかでは、現在にいたるまで「家族」「女性」「共生社会」「青山学院女子短期大学の歴史」などに関わる研究プロジェクトが行われてきました。その一方で、欧米や日本の学問研究の場では、1990年代後半ごろから、「女性学」から「ジェンダー研究」へ、という視点の変化、研究方法の深化が進みます。「女性」だけに光を当てているのでは、新しい時代の男女共生社会を考える上では不十分であって、「男性」の問題も合わせて考えなければならない、あるいは、そもそも「女性らしさ」「男性らしさ」といったものがどのような力学のなかでつくりあげられるのか、その構築過程を見ていかなければならない、といった点が、とくにジェンダー研究で重視される問題になってきています。

さて、ここまで見てきましたように、青山学院女子短期大学の70年間の歩みを振り返りますと、もちろんその中にはさまざまな学科があり、この短期大学のすべての活動を一色だけで塗りつぶすことは不可能です。しかし、そこにひとつの大きな核として、「女性として生きること」を学ぶという「女性学」、さらにはその発展形態としてのジェンダー研究というものが息づいていたことは、十分に確かなことと言えるのではないのでしょうか。

以上のようなことから、私たちは、青山学院女子短期大学の70年間の歩みを、総合文化研究所内に新たに設立されたジェンダー研究所のなかに集約し、さらにそれを「スクーンメーカー記念ジェンダー研究センター」というかたちで青山学院大学の中で継承・発展させたいと考えるにいたりしました。

最後に、私たちが女子短期大学のジェンダー研究所、さらには青山学院大学への移管後

にできあがる予定の「ジェンダー研究センター」のなかで、どのような活動を具体的に展開していきたいと考えているのかを少しご紹介します。

この間、私たちは、都内のほかの共学大学のジェンダー研究所／センターを訪問したり、そこで中心的な働きをされている先生方に講演をお願いしたりして、具体的な活動内容について学んできました。そこでわかったのは、どのジェンダー研究所／ジェンダー研究センターも、教員の研究だけで閉じているわけではないということです。私たちも、研究事業・社会貢献事業・教育事業という三つの柱を考えています。

研究事業としては、まず「女子教育の検証研究」があります。これは、これまで女子短期大学の総合文化研究所で行われてきた自校史研究の延長線上として、とくにオーラル・ヒストリーの手法を用いて、卒業生への聞き取り調査を行う、といった趣旨の研究を意図しています。また、ジェンダー研究については、青山学院大学でも、さまざまな分野で先進的なジェンダー研究を展開している先生方がおられますので、そうした先生方のお力を借りながら、ジェンダーにかかわる研究事業や、シンポジウムの開催などを考えています。

社会貢献事業としては、ギャラリー運営があります。この女子短期大学に芸術学科があったことで、私たちが大切にしてきたギャラリーを活用して、ジェンダー平等を目指す啓発活動をより広く社会に対して行うことを目指します。また、女性のエンパワーメントを目的にした事業を展開します。とくに青短では、卒業生が自発的な生涯教育にとっても意欲的ですので、人生の再設計にむけたワークショップや、生涯教育の場の提供を今後も継続したいと考えています。

教育事業としては、「教育プログラムの開発」があります。このなかには、センター企画の「冠講座」を設けて、青山学院大学の全学生に開かれた青山スタンダード科目として開講することや、ジェンダー・セクシュアリティに関連する授業をリスト化して公開することが含まれます。また、「学生の学びの支援」としては、懸賞論文、学会・シンポジウム参加補助などを考えています。さらに、「カフェの企画・運営」も重要な活動として位置づけたいと思っています。「カフェ」というリラックスした場で、学生たちが自分たちの日常のもやもやしたことを話し合ったり、多様な性のあり方について学んだりすることで、より広く人びとが「つながる拠点」をつくることを目指します。

女子小学校の開学から146年の今年、女子短期大学は創立70周年を迎えます。女子教育を通じて、「覚醒した女性の育成」を目指し、女性のエンパワーメントやジェンダー平等に寄与したいと願い続けた本学の歩みを、私たちは男女共学大学のなかに引き継ぎ、新しい世代の女性の未来をひらきたいと願っています。

第二部 上野千鶴子氏、落合恵子氏、河野貴代美氏による鼎談（以下敬称略）

河野：第一部のジェンダー研究所の説明、なかなか興味深かった、面白かったなという感じです。その話に続けて少し個人的な経緯をお伺いしたいと思います。自分はどうやってフェミニズムに出会ったか、なぜフェミニストになったかということをお話しいただけたらと思います。

どうやってフェミニズムに出会ったか、なぜフェミニストになったか

上野：私は関西で10年間女子短大の教師をやっていました。平安女学院短期大学というんですが、平女と言っても関東の人にほとんど通じないので、一番簡単な説明の仕方は「西の青学女短です」。本当に伸び伸び生き生きした女の子たちが、ブランド企業に就職していくという短大でした。

青短の70年の歴史が終わる、その置き土産を「ジェンダー研究センター」としてつくられたということに、深い敬意を表したいと思います。それを最初に申しあげたいと思っていました。

こういう研究所をつくるのに、予算とコストとスペースを確保するって、学内政治では大変なんです。ご苦労さまでした。よくおやりになりました。

私は東京大学にいましたが、東京大学にはジェンダー研究所はございません。それを私の在任中につくれなかったのは、いまだに痛恨の思いです。ジェンダー研究所って、どこにでもあるもんじゃないんですね。国立でもお茶大、奈良女、一橋、私学だとICU、早稲田、立教、愛知淑徳、そういう数少ない中の一つに青山学院大のジェンダー研究センターができるんです。本当によくやってくださったと思います。これをこれから続けていって、そして後進を育てていただけるということに、まず深く敬意と感謝を捧げさせていただきます。

私がどうやってフェミニストになったか、理由は二つあります。一つは育ちです。家庭内家父長制のある、日本の普通の家庭で育ちました。ワンマンの亭主関白の父に、それに仕える専業主婦でしかも長男の嫁の母。そして気の強い姑のいる家庭で、そのおやじとおふくろの関係をじっと見ながら、母のような人生が私を待っている将来の運命だとしたら、割に合わない、やってられないと思ったのが、まず第一です。

それから二つ目は、私が若かったころ、学生運動がありました。その中で同志だと思った男の子たちから受けた扱いですね。あのときあの場であのやろうが私に何を言った、何をしたっていうリストが延々とあります。そのときの恨み、つらみが残っております。私がフェミニストになったのは、私怨からです（笑）。

落合：公憤ではなく私怨、私憤で上野さん、フェミになられた。すべての公憤のスタートは私憤であろうという気がしています。これは私の言葉じゃなく、井上ひさしさんがお書きになっていたんですが、わたしもそう考えます、自分の人生を振り返って。

私自身がいつどこでどのようにしてフェミニズムと出会い、フェミニストになったのか。とてもはっきりしていることは、私が考えていたこと、私が迎えたいと願っていた明日の輪郭が、ある日、海の向こうからやって来ました。それが Women's Lib と呼ばれるものでした。

「私は私なんです。私の人生は私が決めていきます。私の人生について力をもって介入しないでください。私は私です」と。

私はどうも子どものときからフェミニストだったのだと思います。もしかしたら、生まれたときから。1945年敗戦の年に栃木県で生まれましたが、そのとき母は22歳。結婚はしていませんでした。今でこそシングルマザーと呼ばれますが、75年前は極めて「不道德」と言われる選択だったでしょう。親類縁者にも教職につくものが少なくなく、その家庭のいわゆる「長女」（子どもを長幼で分けるのも私は差別だと思っていますが）だった彼女が、結婚をしないで子どもを産む。戦争末期のこの国では、許し難いスキャンダルであり掟破りだったと思います。

物心つくころになった私の周りにあった言葉は、「あの子ね、お父さん、いないんだよ」。「かわいそうな子ども」という位置づけ。過剰な同情に、むしろ私は反発を覚えました。明らかな差別よりも過剰なる同情（それも差別の変形ですが）がすごく居心地悪くて、嫌で仕方がなかった。

それから学生だった叔母たちが、「この子は就職試験を受けるときにまず落ちるよ、戸籍に父親の名前がない、それだけで問題になるよ」とか、いろいろなことを言っていて、ああ、そういうことなのか、この社会は、と気づくきっかけをもらった。あるいは「おまえんちはお父さん、いないんだろう、非国民」と。非国民という言葉を知るはずもない、子どもの私と同じ年代の子に言われて……。

そうなんです、差別意識は上の世代から次の世代、そのまた次の世代へと、多くは言葉を通して再生・再助長される場合が多いのだと、思うのです。

何だろう、この生きにくさは。何でみんな勝手に私が寂しいか寂しくないとか、悲しいか悲しくないとか、決めつけるのだろう。何か変だ、変だと思っている子ども時代が続きました。と言っても四六時中、変だと思っているわけではなく、楽しいこともうれしいこともたくさんあったと思うのですが、小学校の何年生の時だったか。家庭科の授業で運針があった。私、運針が嫌いだったんです。何の目的もなくただただ一方向に縫っていく……。面白くない。そのとき先生に次のように注意されました。「いい『お嫁さん』になれないよ」。

「いいもんね」。そう思っていたのですが、運針が苦手な男の子は言われなかったのですよ、「いいお婿さんにはなれない」と。

それが小学校の記憶なら、女子中、女子高にも、同じような言葉があつて、立ち止まった時、瞬間がありました。ただ女子だけの学校で私が楽しかったのは、女子だけでしたから文化祭などの大道具でも小道具でも、全部自分たちがつくった。これが共学だと、性別

分業のもとで、大道具は男子、と決められていたかもしれない。

私はいわゆる全共闘世代の1.5歳ぐらい年上ですが、学生運動の初期の頃のことです。いわゆる既成の価値観をこわして、新しい価値を創りだしていこうという熱い意識を有していた男子学生の中でも、やはり「女性の役割」というのが、ある種、決まっていたことも驚きでした。自由平等を語り、新しい明日への理想を語った人たち、男子学生たちが、私たち女子に求める役割が、既成のそれと相似形だった。

すべてがそうではなかったのでしょうか。失望しました。で、海の向こうから押し寄せてきた Women's Lib の流れに触れるにつれて、考え方が自分のそれに近いと思うものがあり……。これだよね、私が探していたのは。

ところが日本を見ていれば Women's Lib なんて、とんでもない女たち、はねっ返りがやっているのだと。私もずいぶん言われましたけど、男にもてない女がやっていると。「おまえらに、もてたくねえ」や、と。「もてるってレベルがあるんだよ」。就職すればまた同じ。私はラジオ局に就職したんですが、つまりリベラルだと言われている、一見そう思われがちなメディアが、いかに男性社会なのかという体験もした。そういった子どもの時から20代を経て、私は、私の中の名前がなかった霧のようなものに、名前を見つけることができました。「これがフェミニズムです、私をフェミニストと呼んで」と。

河野：私は小学校1年生が昭和21、1946年で、小・中学時代に、戦後、張り切っていた若い先生たちに民主教育を受けてきたので、ある種洗脳されて、あんまり私憤がないんです。勤めたところが精神病院です。精神病院は、看護師さんのほとんどが女性、男性も少数いますがほとんどが女性で、精神科医療の特徴は医学書を読み漁るより経験が重要なんです。そういう中で女性が威張っていて、そのうちの私も一人として、ついでに威張らせてもらって（笑）。それで、あんまり私憤的なものを感じていなかったと思います。労働組合運動とか、それからさまざまな社会運動、政治運動に実は関わってしまっていて、高校に入って直後、共産党のシンパになったのです。それから労働組合に入って、で、フェミニズムに出会ったのがアメリカです。



河野貴代美さんと上野千鶴子さん

上野：精神病院におられて、その中で威張っていたから私憤はないとおっしゃったでしょ。でもね、私、それをよく理解できない。精神科のドクターはほとんど男じゃないですか。ドクターが男で看護師は女、これを職業的家父長制と言うんですが、全く疑問を感じられなかったんですか。

河野：個別に、あの先生患者をバカにしているとかは感じてはい

ましたが、男女間の不平等感覚には十分至っていなかった。言葉もなかったし。でも社会運動をやってきましたから、社会的不正義、格差、不平等、そういうことには敏感であったつもりですね。私は東京多摩市の大きな古い、後に「社会的入院」と言われるようになった、回復しても退院できない患者さんのいる吹きだまりみたいな精神病院にいましたから、何ていいますか、そこにいて扱われる患者さんの様態というのを、もろに分かっているわけで、やはりそれは私憤から公憤ですね、障害者差別として。それで、「私を探して」アメリカでフェミニズムに出会った。1970年頃です。

そのときに私は、これが私の求めていたものだとか確信しました。じゃあ、これまでやってきた社会的な活動や政治活動と何が違ったのかと言われると、うまく言葉になりませんが、私が女性である、女であるということの原点がフェミニズムですよ。女であって女として生きていて、おっしゃっているようにさまざまな差別を受けていて、そこに焦点を当てると同時に、男性に従属するように仕組まれた女性の内面を再考してみよう、という点がピッタリきました。これが私の求めていたものだって。

私は実は本当に救われたんです、フェミニズムに。自分が何したいのか、これまでいろいろとやってきたけど、いまいちピンとこないという中で、フェミニズムに出会ってまずNOW（注1）に入り、アメリカでCR（注2）なんかをやってきました。フェミニズムの、私の重要視するメッセージが、「あなたであっていい」というものです。私はダメなんじゃないか、どうすれば自信が持てるか、という疑問を払拭してくれた。後から言葉が作られて、セクハラやチカンに出合う私がどうだからではなくて、女だから被害者であるっていうところからの私憤もあります。

それはそれとして、あなたであっていいよというふうなサポート。これ素晴らしいです。また後にさらに言葉をつなぎたいと思っていますが、本当になかなか、あなたであっていいよというメッセージがもらえない、特に日本の性差別的文化においては。アメリカのフェミニストから私がもらって、女性の皆さんに伝えたい。私はフェミニスト、フェミニズム一本やりで行きたい。もうあんまり余生は長くありませんが（笑）、本当にフェミニストに出会ってよかったな、幸せだったなというふうに思っている昨今です。

安心して自分のことを語り合える場があるか

上野：私は私憤より私怨って言いたいな。私の恨み、つらみです。CRはConsciousness-raising groupの略で、意識覚醒グループって堅い訳語がありますが、実際には、そんな言葉を知る前から、女たちがお互いに集まって、自分の経験や愚痴や悩みや苦しみを語り合っていました。後からCRという言葉を知って、何だ、私たちもっと前からやっていたねと思いました。河野さんがアメリカにいらしたというのは、日本がよっぽど生きづらかったからですか。

河野：はい。

上野：そこのところを話してください。

河野：生きづらかったのは、社会的より個人的な煩悶だと言えます。私が渡米したのは1968年ですから、フェミの女たちがCR的なものをやっている、当時日本にいませんでしたから、よくわかりません。それ以前ならフェミニズムもまだ入っていないのでは？CRで、今ふっと思ったんですが、このジェンダー研究所にカフェみたいなことをおつくりになるとおっしゃっていて、それって私、面白いと思います。この場の私たち全員は女性学を教えているはずですが、私の場合は、一種のカフェですよね。大学で、一応単位も取りますが、一種の意識覚醒。いろいろなことを語り合って愚痴も言ったり慰められたり、というふうな形でやってきました。こういう場がほかのジェンダー研究センターにありますか。カフェをやっているところ。

上野：ICUもよくやっていますね。

河野：それもCRって呼ばないんでしょう。

上野：そう呼ぶ必要は全然ないと思います。そういう概念は後から教わったけども、どこでも自然発生的にやっていることでしょう。フェミニズムは三者三様、さまざまな動機がありますが、どれも私から出発するという点では全く変わらない。私から出発する「私」が、時代と世代でどんどん変わっていきますから、その人たちが自分たちの問題を安全に語り合える場が必要だというのは、ジェンダー研究センターなら、どこでも実践しておられることで、それをここでもやろうってことです。青山のロケーション、集まるのにいいですね。

河野：エンパワーメントっていうのは、本当にそのCR的な話し合いからずいぶん醸成されてくる部分があります。エンパワーメントは、そう唱えたらそうなったわけでもないし、相互交流の中でしか育たないような一面があります。だからその意味では、日本でやっていたCRに関しては、わざわざCRと銘打ってやったこと以外の、例えば初期の、70年代初期の話し合いそのものは知らないのでも何とも言えないんですけども、アメリカのCRっていうのはたぶんちょっと違うんじゃないかなって。

上野：実質的にやっていました。後でConsciousness-raising groupというカタカナ言葉が入ってきたら、同時にファシリテーターという訳の分からない役割も入ってきましたが、そんなもん要らない、もっと前から私たちはやっていたよという、もっと実践的な語り合いがありました。今でも忘れもしない京都時代の思い出ですが、私たちの話し合いの場に自転車の前に買い物かごからダイコンの葉っぱが出ている、それを引っ張ってきた女性がいたんですよ。どうしたのって訊いたら、「姑にお買い物に行くって言って出てきたから、長くはいられないんだけど」と言って。もし女性学の研究会に行くと言ったら、「あんたみたいなあほが、そんな勉強をしてどうすんねん」と姑に言われるわけです。そういう姑の話をわーっと言って帰るというのが、実質CRだったんですよ。

河野：本来のCRにはファシリテーターはいません。料金をとって、そのような役割を設定する人もいたようですが、それはCRとは言いません。私、CRの「井戸端会議的機能」で日々のうっぷんを吐き出してスッとするのは了解ですが、少なくともアメリカの発出

において CR は、それだけが目的ではなくもっと「政治的」。

でも、さておいてこの間の変化みたいなのは、どういうふうにお思いになりますか。その CR なんかをやっていた1970年代からちょっとたって80年以降かな。

上野：今すごくいい状況が起きています。ZOOM 女子会です。ZOOM でお互いに話し合おうと、ZOOM の背景にプライベートな空間が映るでしょう。そうすると、私的な話がぼろっと出る。それで、その中で ZOOM 女子会が実質 CR と同じような役割を今、果たしつつあります。

河野：若い子たち。

上野：若い人たち。私はそういう年齢と世代の構成が違う ZOOM 女子会に幾つも関係しているの。若い子は学生さんから70代ぐらいまでの人たち。これっていいな、と本当に思います。

河野：それは個人、自発的に、何か自然発生的に？

上野：もちろん誰か言い出しっぺがいて。落合さんのところはそういうことをやっていないの？

落合：ほぼ30年前から定期的に月に1回あるいは2回ぐらい、講師を招いていろいろ話し合いを続けてきています。2011年3月11日以降に始まった、講師を招いた講演会のようなものもあります。それが終わった後、幾つかのグループでコーヒーを飲みながら話し合いをされているとかいろいろな形はありますね。反原発というテーマで集まっても、親しくなれば「うちはさ」っていう話になって、だから Consciousness-raising group なんて言葉を使わないけど、私は今、藤沢周平さんの江戸の職人ものというか、人情ものの短編を読み返しています。江戸のおかみさんって、「井戸端会議」めいたものをやるじゃない。亭主との関係性においては家父長制がたっぷり入っているんだけど、お米とぎながら話していることの中には、ため息や憤りや無念さや、私は本当は誰なの？ これが私の人生なの？ という CR めいたものがあつたかもしれないなって。

読んでいると、そこに出てくる本当に貧しくていろいろな思いをしているおかみさんたちや娘たちが、話し合って、お互い元気づけている。いいからここで言いなよ、こたえは出ないかもしれないけれど、言葉にして吐き出すことで、少しは軽くなるものもあるし、少しは見えてくるものがあるかもしれないよって。それを読んだときに、これも一種の CR の変形ではないかっていう気がしたんですよ、形は違うけどね。

だって、女性が仲のいい女たちが集まってビールを飲んででもいいし、コーヒーを飲んでもいいけど、「実はさ」って必ずあるじゃないですか。それを長い間、女は長話だから、いろいろな形で言われてきて、否定的にとらわれてきた傾向があつたけど、もう何十年も、むしろ意識的にそれって悪くないよねと思う女たちが増えてきているなっていう気はしますよね。それが今の若い人たちにもいっている。若い人たちはあまり私的な話をしないというでしょう。確かにうちの若い人、事務局でもそうですよ。

ところが、何らかの形で1回壁を越えると、どんどんどんどん言葉を、言葉の獲得、あ

るいは言葉を自分で造語かな、造っていく。そういう感じの。だから ZOOM、面白いなと思いますね。

上野：それに触発されて言っているんですか。「聞いて、聞いて、こんなことがあったのよ。私、悪い？」って、こんなふうにしたときに、「あなたは悪くないわよ、それはだんなが悪いに決まっているじゃない」みたいなことを言う間柄っていうのは、どこにでもあったと思います。同じことを夫に言っても理解されない。親戚なんかには言ったらひんしゅくを買う。隣近所には通じない。会社の同僚からも浮いている。そういう女たちが、変な女たちなんですよ、はみ出した変な女たちが集まって、思いの丈を語って、「あなた、悪くないわよ」って言ってもらって、もう一度、理解してもらえない人たちのもとに戻っても、元気出して生きていこうと思える。私はひとりじゃないって。これをエンパワーメントって言うんじゃないですか。

河野：そうでしょうね。

上野：だから何でもかんでも集まればいいってもんでもない。そのためには、何か言っても「そんなばかなこと、あなたの思い過ごしよ」とか言われなくてすむ安全な場所が必要なんですよ。若い人の話を聞くと、安全な場所がないって言う。

河野：そのとおりなんですね。

上野：安全だと自分を感じられる場所がない。だから他人から距離を置く。どうしてかといったら、過去に傷つけられたり傷ついたりした経験があるからって彼女たちが言うんだけど。私たちの世代はもっとざくばらんに人に踏み込んだり、踏み込まれたり、傷ついたり傷つけられたりして、関係をつくってきたような気がします。

落合：「個人的なことは政治的なこと」、私は幾つものときかな、出会って、やっぱりこれだと思ったんです。

多くの女たち、私の母も含めてですね、不幸は自分がまいた種の結果だと思い、苦しみとか悲しみを背負っていかうとした。そうじゃないだろう！ 社会構造が不幸の種をまいている場合もあるんだ。それを私たちは背負わされているんだっていうことを、言葉で短くあらわしたのいが、まさに Personal is political.

私が放送局に入った頃、女性の仕事は男性のメインの司会者の言葉に「はい、そうですね」って言うのが役割だと教えられた。好きなように自己表現していいよ、というひともいたけれど、実際の番組ではおおかたの役割は決まっていた。で、少しは上手に反論できないかと挑戦したけど、こちらは力がないから、大体破綻する。

河野：そうなんですか。

落合：そうですね。そんなことは数えきれないほど。反論して失敗すると、余計あいつは駄目だって言われたりする。その背景の中で、あれ？ 何で女性は「はい、そうですね」係なの？ なぜ男性がいつも新しいテーマを見つけて提示するの？ ここにも、同じ構造があるじゃないか、と。

そういったものを全部見ていく中で、Personal is political. だって気が付いた瞬間はあ

るし、私は今でも若い人たちね、特に# Me Too の運動が出てきてよかったなと思いつつも、まだそれはあなたが悪いわけじゃないよね、社会構造から生まれたんだよ。Personal is political. ということはずっと言わなきゃいけないという意味では、変わったものと変わっていないところという両方があるのかなと思ったりします。

変わったこと変わらないこと

河野：その変わっていないところというのはどんなところ。

落合：同じことを言わなきゃいけない。

アメリカ合衆国でいま現在起きていることもいつか体験したことではないですか？ 私たちはずっと前に学んできたわけです。アフリカ系の人たちはこんな差別をされてきた。ヒスパニックだってそう。例えば1960年代に、私が生まれて初めて連れて行ってもらった新宿のジャズ喫茶で、ビリー・ホリディの歌を聴いた。そのときにはビリー・ホリディって名前も知らない。で、「ストレンジ・フルーツ」、奇妙な果実という歌を聴いて、そばにいた誰かが訳してくれた。南部を旅すると大きな木があり、その枝から黒いストレンジ・フルーツがぶら下がっている。それが風に揺れて南の日差しに焼かれ、カラスに突かれて、最後は地面に落ちる……。それはリンチされて吊るされたアフリカ系アメリカ人の死体なんだよ、と。

人種差別はビリー・ホリディの時代よりずっと前からあって、それがまだ今も終わっていない、答えが出ていない。この間のジョージ・フロイドさんが殺害された事件。ミネアポリスの近郊で白人警官のひざによって圧死させられた彼。その後、動画でキャメロン・ウェルチさん、18歳だったかの彼が投稿した中に、母親からずっと教えられてきた幾つもの約束というのがあった。たとえば、パーカーをかぶって外に出ちゃいけない、とか。つまり怪しい者だって最初から思われるとよくないことが起きる。それから店に買い物に行ったときに、レジ袋かレシートを持って外に出なさい、とか。じゃないと万引きしたと思われる。白人の女をじっと見ちゃいけない、とか。どう考えたって無理なことを、今リアルタイムで生きている18歳のアフリカ系アメリカ人の青年が母親から教えられている。

ある部分、少し扉が開いたと思っても、また閉じられて、大統領がああいう人だからというものもあるかもしれないけれど、本当に変わっていないんだなっていうこと。そのため息を一部に持ちつつ、でも前に進んでいくところもある、という実感もある。それ



落合恵子さん

は女性問題、本当は男性問題だけど、フェミニズムについても同じことが言えるかもしれない。# Me Too でもそうだけど。私は40年近く前に出した『ザ・レイプ』という小説も『セカンド・レイプ』も、ほんの少しの波を立たせることしかできなかった。そんな時に、世の中が変わっていないなあと。

河野：そのお書きになったときの周辺の反応みたいなのはどうですか。それへの反応。

落合：とても分かりやすいのは、当時週刊誌が、私がポルノを書いたって。つまりレイプというのはポルノグラフィという娯楽だったわけです。今でもそうかもしれない。男性社会にとって。

河野：それは女性から？

落合：男性。

河野：男性からの反応ですね。

落合：一方ではご自分がつらい思いをして、被害に遭ったという女性から、ありがとうという手紙もあった。もともとそういうひととの出会いで書き始めたものでしたので。だからここ数年、Me Too の運動を見ていて、変わっていないなと思いつつ、反省します。私たちの世代が次の世代に手渡し、次の世代がまたその次に手渡しという、この手渡しの活動が、どっかうまくいかなかったんですかね、途切れていたのかなってという反省もあって。

上野：変わりましたよ。

三十数年前には、『ザ・レイプ』をポルノ小説だと勘違いした男がいた時代。今はさすがにそれはないと思います。

落合：そうですね。

河野：そうでしょうかねえ。ますます商業化された性産業にはたくさんあると思いますが。

上野：はい。# MeToo で変わったなと思ったのは、30～40年前だったら、女性がセクハラとかを訴えたら、「あなたに隙があったから、あなたの落ち度よ」「いなすのが大人の女よ」って年長の女から年少の女に言われたもんだけど、こんなに変わったんだと思ったのは、年上の女たちが、「私たちが我慢していたせいで、あなたたちにこんな思いをさせてしまった、ごめんなさい」って言い出したことです。これは大きな変化です。マスコミの女性たちが出した『セクハラ白書』を見ても、私たちが我慢していて変えられなかった、ごめんなさいっていう発言がいっぱい出てきます。やっぱり確実に変化があると感じます。

この河野貴代美さんの編著『それはあなたが望んだことですか』は、フェミカンが登場してからここ半世紀ぐらいの歴史を感じさせるすごくいい本なんだけど、でもね、一つだけ文句があるの。どうしても言いたいことがあります。それは何かと云ったら、「フェミニズムが後退を余儀なくされた理由」というところに、「フェミニズムの学問化がもたらした負の影響」(242ページ)と書いてある。そしたら私、「A 級戦犯」になる。フェミニズムの学問化が起きたんじゃないんですよ。フェミニズムが学問の世界で先行したのは事実。問題は学問の世界にとどまって、フェミニズムの大衆化が起きなかったということ。

その大衆化の中にサブカルチャー化とか、アートシーンへの登場とか、そういう動きが最近ようやく出てきて、フェミニズムが学問の世界から越境しつつあるんです。学者は学問の世界で自分が持っている学問というツールを最大限に使って奮闘してきたんですよ。それをしなければよかったなんてことは誰にも決して言えません。

そして、そのおかげで、個人の身の上で起きていることが構造のせいだって言えるようになったのは、学問の世界でそういう概念をつくってきたからこそ。そもそもジェンダーという言葉だって、もとは日常用語にない学問用語ですからね。若い人たちの間で使われている言葉、家父長制とか不払い労働、ミソジニーとかホモソーシャルとかっていう言葉を普通に日常会話で使えるようになったのは誰のおかげって、やっぱり言いたいです。それは学問の世界で全力で奮闘してきた女性学の研究者たちがもたらしたものですからね。それが武器になってきたんですから。

落合：河野さんの編著であるこの本、面白かったです。このタイトル、最初、分からなかった。「それはあなたが望んだことですか」っていうの。読んでいくうちに、そうねって、これなんだよねって。私たち問いかけなければいけないのは。それはセクシュアルハラスメントでも、まさにそれであるわけなので。私もちょっと引かかったのは、同じところ。えっ、貴代美さん、これを書いちゃうのって、すごく不思議な気が。だって、あなたもやってきたんじゃない、と。でも、何となく分かる。行ったり来たりしている。貴代美さんの生き方を私が勝手に言うのも変だけど、その中に、アカデミズムという枠内で終わっちゃいけないという思いがあって、もしかしたらそれは、クライアントに出会ったり、ぶつかる中で感じてきて、それがさっきの言葉になったのかな？

河野：私も戦犯の一人といえそうですけれども、フェミニストカウンセリングは実践のさいたるものですから、クライアントの役に立たなければ無意味ね。最近のフェミニズムは、運動より理論にいて難しくなっているという一般的な話が一時わりと聞かれることがありました。フェミニズム自体が拡散して（広がって）、運動もシングル・イシューでしか戦えない、学問も進（深）化してきたのはたしかじゃない？しかし普通のフェミ人にとっては、私の親友であった竹村和子さん（注3）のお書きになったものなどは全然分からない。

ただ研究として、竹村さんの業績は素晴らしいと思うんだけど、やはり研究なんですね。だから理解可能か不可かというより、女性の実生活から離れたように感じられたとは思います。

変わったことと変わらなかったことに戻りますが、あえて言うとな、私が今暮らしているごくごく日常の中は、いわゆるマジョリティのほぼ高齢の普通の女の人ばかりです。彼女たちとは居住宅、スポーツクラブ、ピアノ教室、絵の教室で一緒です。多くの方は、たぶん夫の年金でやっていますよ。だから、じっと家にいるとか、あるいは夫に行ってもいいですかなんて言わなくなってきた。来ている。

そうであっても、やっぱり今日は夫がいるから早く帰らなきゃいけない、ご飯をつくら

なきゃいけない。それから私に、どうも相手がいるふうに見えないから「ご主人さまはひょっとして亡くなったのですか」みたいな言い方で聞かれるとね、むっとするんですよ。「ご主人様」はないじゃないですか。でもその人たちが人間的に質の悪い人たちかといったら、そうじゃない。丁寧に思いやりもあるようで、でもジェンダーの性別役割はきちんとやっている。これは外せない。外すなんて考えてもいない。

その意味では、上野さんがおっしゃっている変わった層って確かにあると思うんですね。でも、まだまだ変わらない層っていうのがあって、例えば# Me Too もあったけれども、でも暴力がなくならないじゃないですか。これは社会が暴力を糾弾して、し尽くして少なくなっているということにはなっていない現実。だからそういう意味で言うと、私の感覚の中ではそんなに変わっていないなというのがあるんですよ。変わった部分は後でゆっくり伺いますけど。

上野：河野さんの周囲にいらっしゃる、オバサマ、オネエサマ方はそういう方かもしれないけどね。最近のフェミが難しくなったわけじゃなくて、フェミの中でも竹村さんみたいに難しいことをやっている人もいますけど、それをやさしくする人たちがいないことが問題です。私は、学生にいつも言うんだけど、専門用語を使ったら、それをチュウサン階級の言葉で言ってごらんって言うの。チュウサン階級って、中学3年生のこと。中学3年生までに学ぶ日本語で説明できないんなら、専門用語なんて使うなって言ってきました。河野さんの周囲にいるオバサマたちがスポーツクラブに行く自由を行使しながら、「時間だから亭主のご飯をつくんきゃ」と言ったら、「えー、まだそんなことやっているの、珍しいわね」とかその場で言えればいいじゃない。「私みたいに自由になったら」って。「そうですよね。一日も早い夫の死を願っています」という返事が返ってくるかも。これこそがコンシャスネス・レイジングですよ。

河野：そういう反論は効果があると思えません。効果を考えるなら、もっと世間話に付き合って、多少は話し合う関係をつくらなければ、私が浮くだけです。もともと浮いているから、いいのですが。上野さんはこのような中にいらしたことがないでしょうよ。個々の女性たちにはそれぞれの貴重な自分史があるのはわかりますが、でもその中にどっぷり居るのは、しんどいし、退屈です。だから黙るしかない。なんで私があなたの孫のアレコレを聞かなければいけないの、とか思いますね。。。。

上野：反論じゃなくて、ノイズを立てるというコミュニケーションをなさったらいい。

落合：やさしい言葉に変えると上野さん、おっしゃってました。とてもおこがましい言い方ですが、私はかすかにそれをやろうと決めてきたんですね。イズムもあります。アカデミズムの中でやってきたけれども、私たちが気が付かないところに光を当ててくれます。新しい発見とは、光が当たらなかったものに光を当てます。光をあてることばがすごく大好きで、その少々光を当ててく側の仕事をしたいっていうのは、かすかにありました。成功したとは思えないけれど。

その一つの形が、この青山から近いですがクレヨンハウスという子どもの本の専門店、

と言ったほうが、通りがいいんです。ジェンダー論の本も置いていますと言っても、皆さん、子どもの本の専門店というほうが安心するんですよ。3階に行っていただくと、フェミニズム系の本がありますという、男性が入り口で「3階は男が行っていいんですか」と言った時代もありました。そんな時代からもう45年です、今年で。今もって、ちょっとだけ引かかるものがあったりするわけ。だからどうぞ一緒に考えましょう、だから料理の本が置いてありますよ、当然ですが、男も女も料理する楽しみを知りましょう。環境の本も置いています。反原発の本も置いています。

河野：それはイズムというか、思想というふうな言葉にこだわらないと？

落合：どっちでも私はいいと思っている。

河野：ああ、そうなんですか。

落合：うん、いいんです。ただね、イズムをイズムだけでとどめ置くことは寂しい気がする。

河野：なるほど。

落合：イズムはあってほしい。でも人間が生きていくってイズムだけじゃないじゃないですか。

河野：もちろんです。

落合：イズムって言っちゃうと誰かの言葉になっちゃうかな、変わらないフェミニズムなら、単なるレトリックだ、と。イズムだって変わらなきゃいけない。絶対これはフェミニズムって言った瞬間に、フェミニズムは崩壊すると、失礼ながらずっと言ってきた。そうじゃないって、イズムは、もっと流動的じゃなきゃいけないと。

だから、ミズ・クレヨンハウスをやるときに、私は、逆説的だけど、この社会からミズ・クレヨンハウスがなくなることが私の理想ですと最初申し上げたのね。だって、それがなくなったとき私たちはジェンダーに対してセンシティブな社会に生きられるわけだから。

でも、現実にはまだ必要な時代でもある。若い人はね、やっぱり # Me Too 以降かな、セクシュアルハラスメントに異議あり、の本はありますかって、かつてね、それも聞かないまま必死に探していた年代がいるんですよ、かつては。

河野：言葉を知らない？

落合：知っていても口に出せない、世の中に被害者であるあなたの責任よってという考えが、意識があったから。自分で聞けない。だけど今は「セクハラについておかしいという本はないですか」って聞く若い人がいる。これはもう、まさに違った気がするんだよね。

上野：落合さんがやってこられた「レモンちゃん」は語りを芸の域に高めて、一般の人にメッセージを届けてこられたんですよね。そういう専門用語を知らないような人たちに言葉を届けるということを、ちゃんと現場でやってこられたんだなということがよく分かります。聴衆に伝わったか伝わらなかったかは、肌で感じますよね。

落合さんのクレヨンハウス、子どもの絵本が売りですよ。子ども食堂が日本中にいっぱいありますよね。キーワードが「子どもの貧困」です。それを聞いたとたん、「子ども

が貧乏なのは親が貧乏なのに決まっているじゃない」と思いました。親が貧乏なのはなぜかという、ほとんどがシングルマザーだからです。

だったら、なぜ「女の貧困」と言わずに「子どもの貧困」と言うのか。「子どもの貧困」というと通りがよくて、企業も行政もお金を出すんです。

落合：それが理由ですか。

上野：そうなんです。「女の貧困」と言うと、自己責任だろうと言われて、公的な援助も渋いです。女って言ったら途端に目を背けられて、子どもって言うと安心するって、やっぱり今でもそうなんです。

落合：今もあるんじゃないんですか。先ほどの子どもの本屋だと何となくという、「うん」とうなずいて、女性の本の専門店、あるいは、そこでフェミニズム系、環境とか何とかって言うと、ちょっと引く人はまだいますよ。

上野：落合さん、それに関して私は振り返って反省していることがあります。80年代に反原発運動から私は袂を分かったんです。分かった理由は、どの集会に行っても、「お母さんたち」と呼びかけられたことです。私はそこにいたんです、おひとりさまの私が。私は、ここで呼びかけられていないのかって思うじゃないですか。それに女の人たちも、出てくる人、出てくる人、「子どものために」と言うんです。

落合：我が子のためにというメッセージがね。

上野：そのとき思ったことは、女の人たちは「子どものために」っていう錦の御旗を立てないと、こういうところに出てくることさえできないのか。どうして「私のために」って言えないんだろうっていう気持ちで袂を分かってしまいました。そして3.11で痛恨の思いで、反省いたしました。

落合：2年前だっけ、3年前の夏だっけ？ 代々木公園でやったときにいらしていたのね。話をしに。周りは「えっ、上野さん、珍しい」というふうに言う。で、上野さんがずっとやってきたすべてに目を通してはいるわけじゃないけど、珍しくないんですよ。当たり前じゃないですか。脱原発、反原発。でも何となくみんながちょっとざわめくのね。それはね、でもいいことなんです。上野さんがここに来て何を言うのかって。つまり、私たちが行って言っても、また同じことを言っているっていうだけであって。あっ、これはすごくいいことだなんて。

ただ、おっしゃったこと、子どものためには、男性もよく言います。女性に限らない。使う。だってスローガンってそのように出てきたし、そこから次の世代という考えは一緒なんです。私もどうしてもなく伝わらないときにあえて言いますよ。次の世代の子どもたちのために、と。それから、なによりも今を生きている私たちのためにと考えませんか。

そういうのはいろいろこう、何ていうのかな、言葉が規定するものの不自由さ。

河野：不明なことを言葉で定義できてよかったというのはあります。フェミニズムは言葉をたくさん作ってきた。MS.とかセクハラ、シスターフッドとか。たとえば「うつ病」と

いわれて、そうだったんだ、と自明化し納得する場合と、そんな診断されてはいや、というのものもある。言葉って両義的ですよ。女という場合、私は女であってよかったと思っています。実態として大雑把に言えば男女を生きている気分ですが。さっき言った、あなたであっていいのよという言葉、あなたはどうしたいの、自分が決めなさい。決めたっていいんだよって、こういう単純なことを、あなた、私を主語としてフェミニズムが発してきた言葉だから、私はフェミニズムの言葉を捨てられない。フェミニズムと一緒に死にたい覚悟ですけどね。

そのイズムに、落合さんは、ちょっと固着したくないという思いをおっしゃった？

落合：すべてのイズムがそうだけど、絶対的になったら窮屈だな、と。私はフェミニストである自分と、心中したいかどうかは別ですが、大事にしたいと思っています。だからといって、イズムはこれでいいってなっちゃうと終わりでしょう。これはフェミニズムだけでなく、すべてのイズムについて言えると思うんだけどね。

上野：ただ、フェミニズムがとってもいいのは、マルクス主義と違って、異端審問がないことです。自己申告概念ですから、誰が名乗っても構わなくて、小池百合子さんが名乗っても構いません。あの人には、言われたくねえよって言う人もいるけど（笑）。破門とかはないので、正統争いがない。はずなんだけど、でも正しいフェミニズムと間違ったフェミニズムがあると、思いこんでいる人がいるらしいですが。

河野：昨年出たロクサーヌ・ゲイ著 野中モモヨ訳「パッド・フェミニスト」。これなどは、教条的フェミニズムを揶揄しながら、ある種の柔軟さを示しているのではないのでしょうか。上野さんのおっしゃるフェミニズムには異端がないという良い例でしょう。

<中略>

女とお金

落合：もう一つのフェミニズムのテーマが、女の人はやっぱりお金を持っていないから、1時間5,000円、1時間2万円、5万円なんて〔フェミニスト・カウンセリングのために〕払えないだろうっていうのがあったじゃないですか。やっぱり事実はありますので、欧米の状況ってずいぶんまたね、政権によって違ってきていると思うけど、あるときはガラスの天井という言葉がまだあって、今でもありますよね。それで「おかしいよ」という女の声がいっぱい出てきたあのころは、女の運動に女がお金を一生懸命自分で貯めたものを使って、今でもあるけどね、そういうのをやっていた。わりと知っている企業のトップに女性が就くと、フェミニズムに何らかの形でサポートをしようという動きがあったような気がするのね。

でも、今はどうなのか。じゃあ、日本はどうなのか。日本ってあんまりないじゃないですか。女性の実業家がそのためにフェミニズムのためにお金を出したい、あるいは妹世代のためにお金を出しますって、ないでしょう。

この間、私、アフリカ系アメリカ人の人々の運動のときに、リーバイス、他の企業、それから Netflix がちゃんと出したじゃない。自分たちの思いを。アメリカに問題がないという顔をするのはもうやめようよ。あるんだよというところ。つまり、大企業としてコマースをばんばん打っていて、内部留保もたくさんあるだろう企業が、ああいう形ですべてではないけど、声を上げていく、手を挙げていく。じゃあ、日本は。ないじゃない。

上野：SDGsの中で企業は、子どもと環境にはお金を出します。ジェンダーには出しません。私たちもNPOをつくった時に企業を回りましたが、無理でした。でも、女性の間でお金を回そうという仕組みは、例えば河野さんがやっていらっしゃる「一般財団法人竹村和子フェミニズム基金」もそうだし、私たちWAN（注4）もWAN基金をつくりました。今度コロナ対策女性連帯プロジェクトを実施して、特別定額給付金に相当する1口10万円をくださいとやったら、来るわ、来るわ、感動的にお金が来ます。

落合：今、どのくらいありますか。

上野：結局900万円以上集まりました。女のあいだで寄附文化を広めたいと言っても、そもそも金持ちの女がいないというのはそのとおりですが、日本でもずば抜けた金持ちの女性が、東海ジェンダー研のスポンサーになっておられます。

その方が名古屋大学にジェンダー・リサーチ・ライブラリーを建物込みで寄贈されました。これは日本の大学では初めてのジェンダー専門図書館だと思います。これは例外ですが、これからは私たちの世代がだんだん死ぬので、子どもがいない私たちは遺贈をしないと、お国に全部巻き上げられますから。

落合：そういう女性たちがこの国に100人いたら、建物まではなかなか無理かもしれないけど、変わりますよ、確実に。それを報道する側にもっと女たちがいたら、その意識を持った女たちがいたら。

河野：報道する、これは大事です。とても大事。

落合：それはね、ここもまたまた難しいことだろうけど、いらっしゃいますよ、だんだん。娘の世代たち。あるいはそのまた娘の世代たち。そういう形に向かってどれだけ私たちがサポートできるか。これも大事かなという気がしている。

<中略>

若い人たちに伝えたいこと

河野：若い人たちにジェンダー研究所を通してでもいいし、個人的にでもどういうことを伝えていきたいと思われませんか。

上野：世代と時代は変わりますから、女の生きづらさは、私たちの時代の生きづらさとは確実に違うでしょう。その人たちに当事者になってもらうしかないですから、例えばジェンダー研がかつての Consciousness-raising group のようなカフェをおやりになるといかがでしょう。どの人もどの時代でも、いつでもスタートラインは「私」から始まるしか

いので、若い人たちのあいだでも同じことをやっていっただけばいいんじゃないかなと思います。

若い人を見ていて思うのは、「こんなの我慢できない」とか、「黙ってられない」という人たちが、これだけ層を成して登場してきたことです。世代が変わったなど確実に感じています。かつてフェミニストと名乗っただけで



鼎談の様子

叩かれたりしたのを見ていて、これはやめておこうと学習した世代が中高年になって、全くそういうことを経験しなかった新しい世代が登場してきて、「こんなことやってられない」とか、「我慢できない」って言い始めました。それが今、うねりになってきているのを、肌で感じます。

河野：世代交代が進んでいる。それはSNS世代なんでしょうね。私なんかはITに弱い人間だから、あまりそのことが実感しにくいんだけど、上野さんのおっしゃる若い世代というのは年代的には人口が少ないんですよね、数は少ない。さっき話に出たアメリカのブラック・ライブズ・マターに出ている世代というのは世代数が多いんです。ベビーブーマーの後、60-70年代のあとの若い世代、人口多い。だから今、やっているあの人たちの運動というのはオバマさんにちょっとがっかりした人たちで、数がある世代がやっている。彼／女はだから、ジェンダーフリーでしょう。そういう意味では実質的に世代交代が起きているアメリカなんかとはちょっと違うんじゃないでしょうか。

日本でそのSNSの実体がなかなかつかめないんだけど、じゃあ、SNSの中でやりとりをすることがジェンダーバイアスないかといったら、そんなことはないんじゃないですか。だから、あなたがおっしゃっているどういう世代がどう変わったかということについてはいかがですか。

上野：私だって、変わっていないな、私が半世紀前に言っていたことを今も言わなきゃいけないのかって、うんざりする思いなんて山のようにあります。だけど、もうここにいる人たちは、過去の人ですから。これから未来をつくる人間ではありませんので、数が多かるうが少なかるうが、質がどうだろうが、若い人たちに未来を託すしかありません。彼女たちは、確実に変化しています。例えばちょっとセクハラ的なCMとかが出たら直ちに炎上して、企業は簡単に引っ込めるようになりました。そんなことは、50年前には考えられなかったです。50年前に「私つくる人、あなた食べる人」のCMに抗議した時代には、「少数派のご意見としてお聞きしておきます」という程度でした。SNSでこれだけのアクションを起こすだけで変化はちゃんと起きるんだっていう手応えを彼女たちは持っている

と思いますよ。そういうアクションは確実に広がっています。何しろ私たちの最近の最大の成功体験は、検察庁法改正案を押し戻したことです。

河野：あれはね、OBのおじさんたちが言ったことがずっと大きいと思います。あのおじさんたちが出てこなければ。

上野：その前から、もううねりは起きていました。

河野：うねりが起きていたって政府が引っ込めるまでいかないのでは。

古い世代だって、いきなり新しい世代に飛ぶわけではないから、子ども・孫とジェンダー規範を伝えてもらっては困る。

落合：でも、ウエルカムじゃないですか。ハッシュタグくっつけてね、みんなが黒川某の件はおかしいと。結果はよかったし、その結果も楽しんじゃうような。あれも新しい流れだと考えます。私なんかどうやってハッシュタグをつけるの？と聞いて笑われた。悲観するほど今の社会は古くも後戻りもしていないと思いつつ……。

河野：そうですか。

落合：でも、一方で楽観するほどすべてがうまくはいっていない。私はその辺、行ったり来たりです、自分の中で。いつもペシミズムとオプティミズムを一つずつ手に持ってお手玉しているような気分だなんていうのは、私も思います。

河野：では落合さんは、新しいこの世代にどんなことを伝えていきたい？

落合：難しいですよ。でも、私好きな言葉で「I can't live your life」という言葉があるんです。「私はあなたを生きることではできません。だから、あなたを生きることができるのはあなたです」という意味なんだけど、そうありがたい。必要なときはそれぞれのIがWeになっていいわけだし、WeがまたそれぞれのIに戻ってもいいしという流れを大事にしてくれたらうれしいなって。

70年安保のときかな。「われらがわれに変わりゆく秋」、女性の歌人。道浦母都子さんが書いておられる。私は「われらがわれに」返ってもいいし、「われがわれら」になる瞬間でも、基本には「われ」ですよ。じゃないと「われら」になれないから、大事にしたいと思うんですね。だから我慢する必要はないというのは何しろ伝えたい。

河野：我慢する必要はない、とね。

上野：今、落合さんが英語で言ったことを、私は日本語で言ってきました。あなたの人生を代わりに生きてくれる人は誰もいないって。

落合：まさにそうですね。

上野：あなたが人生の主役だよ。主役に主人がいるわけではない。基本のきは自分の感覚に正直に嫌なことは嫌、不愉快なことは不愉快、好きなことは好き、やりたいことはやりたいって言えばいい。だって私たちだって、そうやって生きてきたんだもの。私たちは何がほしかったかって自由がほしかったんだものって、心から思います。

河野：その辺は私も同じ感じで、私自身がその言葉に救われて、生きてきたという部分があるから、さっきおっしゃったことが分かりますけれども、これが、若い人に通じるで

しょうか。

<中略>

河野：若い人が、あなたが何をしたいのかっていうことを恐れず自分に尋ねてください。そのときに他者の意見を聞くことは構わないけれども、聞いて役立てることも構わないけれども、まずとりあえず自分ですね。自分がどういうふうを考えるかということを恐れずに自分に尋ねてほしいと思います。それが曖昧だったり分からなかったりしたときに必要なのは、フェミニストの友人。こんな人がフェミニスト？みたいな人はちょっと避けて、基本的に受容的で、そうね、と受け入れてくれそうな人に相談してほしい。そういう人を手元に持っていたきたい。

同年代でもいいし、もうちょっと年上でもいい。そのためには、そういう立場にいる女性たちが、オープンであってほしいし、あまりに忙しくないほうがいいですね（笑）。あの人に相談したいけど、ちょっと忙しそうだなというんじゃないかな（笑）。シスターフッドという言葉はできたけれども、やっぱりそこで信頼できる何人かを知っているか、持っていてほしい。そして、女性として社会の差別構造に立ち向かっていながら、自分の道を切り開いていきたいですね。

その意味では、私はやっぱり今の男性社会の劣化程度にはもう啞然とするしかないの、女性に対する私の期待がとても大きいということを、私の言葉としたいと思います。

何か最後に一言ありますか。

落合：若い世代にはもうさっき言っちゃったけど、あなたの人生なんだよ、あなたが選んでください。それから、選べないときに無理して選ぶ必要はありません。今の社会には、早く選ばなきゃ、早く決めなきゃ、早く前に行かなきゃというストレスもある。人には、立ち止まるときがあっていいし、しゃがみ込むときがあっていい。ふて寝しているというときも大事ななんて迷いもあるし、ため息もあるし、悲しみもあるし、でも、それらも大事な自分にとってのテーマだよということを考えてください。

私、最近、この数カ月で読んだ中で最も心に響き、面白かったのはディーリア・オーエンズという女性が書いた『ザリガニの鳴くところ』。「湿地の少女」って呼ばれて、家庭の事情でたった一人、ノースカロライナの湿地帯に放置された小さな女の子が、自ら自立して生きようなんて思わない幼いころから、独立して生きざるを得ない。社会にある差別や偏見、異質への憎悪も体験して、けれどとても魅力的な大人になる。けれど、殺人犯の疑いがかけられて……、とミステリー仕立てでもあるのでこれ以上は言えない。その殺人の容疑者になったとき、一人の高齢の引退した弁護士が、法廷で次のように言うんですよ。

「われわれは彼女が異質だから閉め出したのでしょうか。それともわれわれが閉め出すから異質の存在になったのでしょうか。もし、われわれが彼女を受け入れていたら、今このときも彼女はわれわれの仲間であったはずですよ。われわれが食べさせ、衣服を着せ、愛し、教会や家に招いていたら、われわれは彼女に偏見を抱くことはなかったでしょう」と。

そしてもうひとつ。「ステイホーム」のとき本当に腹が立ったのは、ステイできる家、

居場所のない人はどうしたらいいのかと。だって今も部屋をなくしている人は大勢いる。フェミニズムとは、と定義付けてしまうのはなんとも落ち着かないのですが、ジェンダーはもちろん、多様なセクシャリティの問題、人種の問題、職業の問題、すべてにおいて、この社会で人を分断しないで生きていけるってどういうことなのかって問い続けるのがテーマだと思う。それらも一緒に妹たち、妹たちと言っても、何世代にもわたっているかもしれないけれど、一緒に考えることができたらいいかと思います。

卒業生からのメッセージ

河野：そしたらこれで終わりますけども、青短の卒業生からジェンダー研究所に対するメッセージが届いているようなので紹介していただきましょう。

鈴木直子（短大元教員）：今日は素敵なお話をありがとうございました。私たち、ずっとこのジェンダー研究所を準備してきた仲間、40代、50代ぐらいの女性教員が仲間みんなで頑張ってきました。ちょうど先輩方と一世代、次の世代ですね。今日はどんな話を伺えるかなと思ったんですけど、やはりその Consciousness-raising だったり、個人的なことは政治的なことっていう、その本当にフェミニズム、日本の最初のメッセージというのを、今日、改めて伺ったなと思います。それはジェンダー研究所をつくってきた主体の私たち自身が、その第一世代のフェミニストたちから受け継いだことですし、それを私たちずっとこの青短の授業で学生さんたちに話してきたんですよ。

その話してきたことについて、ちゃんと彼女たちがそれなりに自分たちの言葉で自分たちの未来を自分たちで切り開こうとしているということは、このメッセージを聞いていただけると分かります。ぜひちょっと最後に3人の方からのメッセージを読ませていただきたいと思います。

1人目が今、現役の短大で勉強している学生さんです。

「青短で女性が自らを認めること、何事にも何にも劣る存在ではないことを学びました。文学史では女性は隠れた存在となっています。そんな暗闇の中で咲く花に光を当てるのがフェミニズムだったと思います。文学に限らず、すべての女性のよりどころであり、学び場であり続けるために、青短初のジェンダー研究所の創設を心からうれしく思います」。

2人目、この方は短大を出て青学に編入した今、青学の学生さん。

「青短のおかげで今までどれだけの女性たちの声が歴史に埋もれてきたのかを学びました。こうして正式にジェンダー研究所が設立されることを大変うれしく思います。女子大という場だからこそ、育てることができたフェミニズムとジェンダーの思想を、共学の青山学院大学において、さらに深め、生かされることを願っています」。

そして3人目は卒業生なんですけども。

「私は45年前の青短の卒業生で、リタイア後、科目履修生を通して老後の楽しみに、ここ5年ほどいろいろな講義を受講しています。学生さんの発言やレポートを見ると半世紀

前と同じようなジェンダーギャップの存在を感じるようにも見受けられます。いまだフェミニズムの言語は外来語なのかもしれません。しかし、自分で考え発信しようとする学生さんもとて多く、これから現実の社会へ出ていく彼女たちに、お3人からエールを送っていただければ幸いです」というメッセージです。

これを聞いていただくだけでも、そんなに悲観する未来ではないと。たくさんの未来にむけて伝えるべきことがあって、受け止める人たちも本当に増えているということを最後にお伝えして終わりにしたいと思います。

質疑応答

河野：ありがとうございました。どなたか鼎談に関して質問はありませんか。

梅垣：ジェンダー研究センターを、私たちはこれから共学の青山学院大学で展開していくということなのですが、河野さんが途中でおっしゃってくださっていましたけど、変わらないさ、ジェンダー状況の変わらないさという問題を考えると、暴力の問題なんかもそうですけど、やっぱり男性の問題というのは結構大きいんですね。このジェンダー研究センターが、どういうふうに男子学生の意識を変えるなり、どういう仕組みがあればいいのかということのを伺いたいと思っています。

河野：それは難しい質問ですね。例えば暴力の加害者更生プログラムというのがあって、まず加害者を「更生」させなければ駄目ではないか。それとそんな時間があるんだったら被害者のほうの回復に手を貸すほうがずっといい。これはずっと論争になってきていて、でも、一部では加害者プログラムをやっています。私自身はもう現場を離れてだいぶたっていますので、どういうふうに男性がジェンダー研究所を使えばいいのか、ちょっと考えさせてください。上野さん、どうぞ。

上野：はい。現場の当事者の声を、お互い立場が違う者同士で話し合うってすごく大事なことです。今、若い人の間で一番大きいテーマになっているのは Sex with consent、同意あるセックス。それを女の子だけで話したって意味がないんで、そういうテーマこそ男の子と女の子が両方いる場で、じゃあ、同意って何なんだ。同意ってどこまでを同意というのか。同意なきセックスでどんなことが起きるのか、避妊するかしないか、そういう身近で切実に具体性のあることを、男女両性だけじゃなくて、LGBTQ も含めて、当事者グループみたいな CR をやっていくというのは面白いんじゃないかと思いますね。

女の子だけでしゃべっていると限界があることを、異性がいる場で乗り越えられると思います。

落合：同じようなことですが、もう20何年くらい前、ある大学で研究室の別々のところでデートレイブについての話し合い。最初、男の子たちって、やっぱりちょっと笑ったり引いたりしているんですね。でも、「加害者にならないために」というテーマから入って、女性にとって「ノー」とってどういう意味か、拒否かということ話し合っていると、本当に一つの話し合いになっていくんですね。そういう意味では、まだまだやれることっ

ていうのはたくさんあるし、だって今はもうなくなったかな、「暗い夜道に気をつけよう」って女性に呼びかける。その前に、そうじゃないだろうって、コミュニケーションってということって、とても大事なことです。

一方で男の子たちが今ね、この時代、とても自分があることに自信を失っているのはフェミニズムがいろいろなことを叫びすぎたという、本当に愚かな論が一方であったりするんだけど。そうじゃない。お互い、自分自身を生きていくために大事なものなんだよねっていうことを、本当にそうだと思ったら、男性が入ってくる。そして、ある大学の男子学生は、自分の好きなガールフレンドがセクシャルハラスメントに遭った。それをみんなと一緒に社会に問い直そう、学内でも何とか戦おうと思って準備し続けた最終段階で、たかれちゃった。抑え込まれてしまった。その無念さの中から、フェミニズムって学ばなきゃいけないって変わった、と彼は言っていた。やれることってたくさんあるかなと思います。

河野：本当ですね。聞いているとジェンダー研究所に対する期待がとても大きいし、私にもそれがあるし、大いに活躍していただきたいと思います。

上野千鶴子 認定特定非営利活動法人ウィメンズアクションネットワーク理事長。東京大学名誉教授。女性学・ジェンダー研究のパイオニア。

落合恵子 作家。クレヨンハウス主宰。社会構造的に「声が小さな側」の声をテーマにした作品が多い。

河野貴代美 元お茶の水女子大学教授。日本にフェミニストカウンセリングの理論と実践を初めて紹介し、各地におけるカウンセリングルームの開設を支援。



記念撮影

注1

NOW

全米女性組織（National Organization for Women）1966年に結成された女性の地位向上を目的としたアメリカの政治団体。

注2

CR（Consciousness Raising）グループ＝意識覚醒グループ

1960年代後半から70年代に盛り上がったアメリカの第2波フェミニズム運動は、草の根のレベルでのCRグループに支えられていた。女たちが毎週一回集まって、自分たちの仕事、恋愛、結婚、子育て、セックス、老い、母娘関係などをめぐって話し合っていた。語り合いのなかで、女たちは、「自分だけの問題、困難だ」と思い込んでいたものが、女たちみんなに共通する問題であることに気づいた。

注3

竹村和子（1954-2011）

日本の英文学者。専門は英米文学、批評理論、フェミニズム思想。

注4

WAN（Women's Action Network）認定特定非営利活動法人ウィメンズ アクション ネットワーク。2009年設立。男女共同参画社会実現に寄与することを目的として、女性の情報や活動の相互交流の場を提供し、女性のネットワークの構築と、女性のエンパワーメントに寄与する事業を行っている。

当日の様子は以下の URL にアクセスしてご覧いただけます。QR コードからもアクセス可能です。

<https://wan.or.jp/article/show/9077%C2%A0%C2%A0>

